

学術変革領域「生涯学」事務局

Email: lifelongsciences@gmail.com
<https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp>



2020年度～2024年度 学術変革領域研究(A)

**生涯学の創出—
超高齢社会における
発達・加齢観の刷新**

01

**NEWSLETTER
2021 March**

Contents

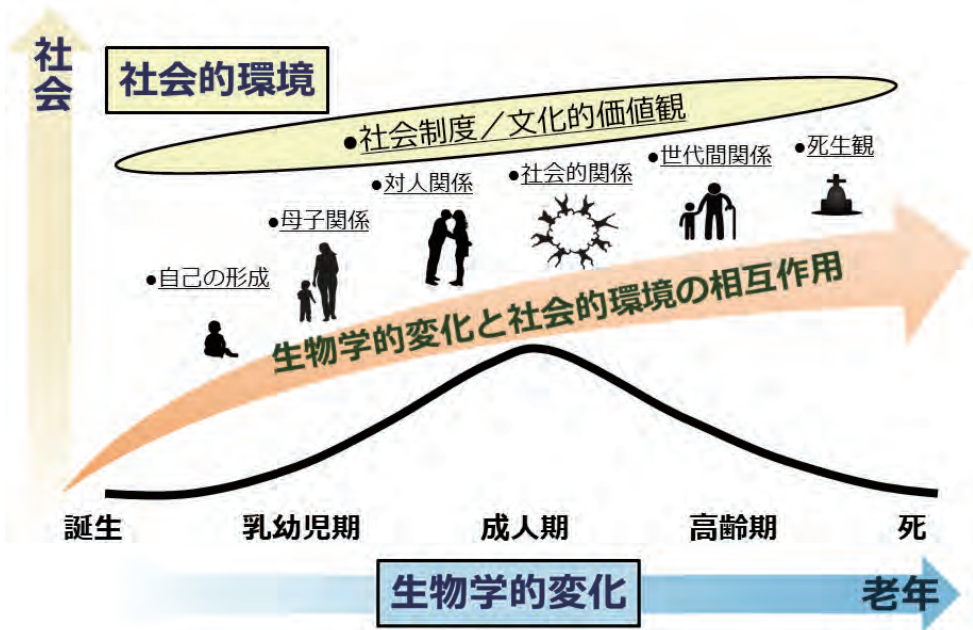
領域代表挨拶
領域概要
計画研究
研究業績
活動報告



月浦 崇
京都大学大学院
人間・環境学研究科・教授

65歳以上の高齢者の割合が総人口の28%を超えている我が国にとって、超高齢社会に対して社会全体としてどのように対応していくのかは、喫緊の解決が求められる重要な社会問題です。これまでは、人間の生涯は「成長から衰退へ」という単純な枠組みでとらえられてきましたが、人生100年時代の到来とともに、従来のような固定的な生涯観だけで人間の生涯を理解することは難しくなっています。そこで本領域では、従来の生涯観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセス(下図)としてとらえ直すことを目的とした、新しい学際的研究領域である「生涯学」を創出し、研究を展開します。

そのために本領域では、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する予定です。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざしていききたいと思います。



本領域の目的

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な発達・加齢観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセスとして明示することを目的とする。そして、人間に関する多様な学問分野を融合することで、新しい学際的研究分野としての「生涯学」を創出する。その目的を達成するため、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象と

本領域の内容

本領域では、既存の学問分野にとどまらない広範で多元的な研究を実施することで、従来の生涯観を刷新するための心理・社会メカニズムの解明とその社会実装を進める。

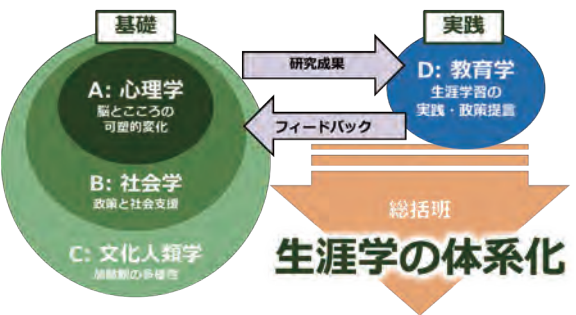
具体的には、高齢期でも獲得できる認知機能の性質と、高齢期には獲得しにくく衰退・消失してしまう認知機能の性質を若年者との比較の中で実験的に明らかにし、柔軟な可塑性が引き出されるメカニズムを明らかにする(認知心理学、生理心理学)。また、認知機能障害の実態とそれに関わる認知予備力について検討する(臨床心理学)。さらに、多様な実社会において、様々な世代や障害に対する適切な生涯観に依拠しつつ、新たな発達・加齢観の下で育まれる豊かな生涯を支えるために、効果的なソーシャルサポートとはどのようなものかを大規模社会調査から明らかにする(社会学)。そして、知識や技能の獲得過程と成熟過程もしくは消失過程が、文化や生活環境が違う場所ではどのように発現しているのか、社会制度や生態環境によってどのような影響を受けるのか、多様な人類社会においてどのような発達観や加齢観、ライフサイクルがあるのかを多様な社会集団に対するフィールドワークから明らかにし、それらの比較を通して多様な生涯観

期待される成果と意義

本領域の中心的な成果は、「生涯学」という新しい加齢観に根差した学際的な研究領域を世界に向けて確立することであり、超高齢社会に有益となる新たな生涯観を社会へ提供することである。すなわち、新しい生涯観に裏打ちされた人間発達の実態を明らかにすることで、生涯発達という発想を社会に広め、人間が年齢を重ねていく中でいかに柔軟性と

したフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基礎的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざす。

を相対化することで、新たな生涯観を生み出す社会的要因とその可能性と限界を探る(文化人類学)。そのうえで、これらの基礎的知見を基盤としつつ、地域や個人に即した社会教育プログラムを実践することで、新たな生涯観の中で実現される社会教育プログラムを実装する(教育学)。このようにして、人間に関する諸科学、すなわち心理学、文化人類学、社会学、教育学等を融合して基礎から応用への展開を進め、さらにそれらの研究を循環させることで、従来の発達・加齢観を刷新する新たな「生涯学」を創出する(下図)。



多様性を持つ存在であるかを示せるはずである。また、脳機能の加齢による可塑的变化のメカニズムを理解し、それに基づいた教育法の開発も期待できる。それは同時に、新しい生涯観に基づく豊かな超高齢社会の実現に向けた科学的基盤を提供することでもある。

知覚系の知識獲得機構の加齢変化

代表者

寺本 渉

熊本大学大学院
人文社会科学部・教授



分担者

日高 聡太
(立教大学現代心理学部・教授)

協力者

川越 敏和
(立教大学現代心理学部・助教)
安村 明
(熊本大学大学院
人文社会科学部・准教授)



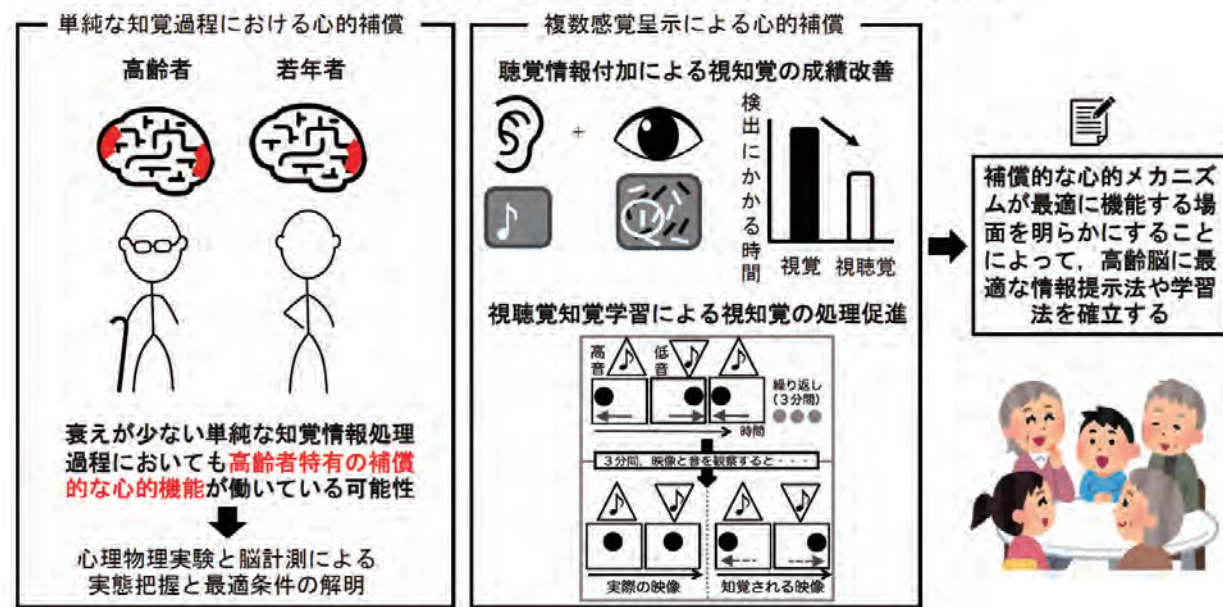
研究概要

高齢者では老視や老人性難聴、注意機能低下など、知覚・認知レベルでの機能低下が顕著である一方、自動的かつ無意識的な処理はある程度維持されている。しかし、高齢者で維持されている機能が必ずしも若年者と同じ心的メカニズムで実現されているわけではない。

実際、高齢者は「見る」という日常的な行為であっても、別の感覚情報を若年者よりも多く利用し、補償しているという報告がある。本研究では、特に複数感覚情報の処理に着目し、そのような心的機能の存在を確認し、そのメカニズムを明らかにする。そして、高齢者、ひ

いては人間が本来もつ知覚・認知の可塑性を最大限に引き出し、より豊かな生活をおくるための方法を提言する。

A01. 知覚系の知識獲得機構の加齢変化



記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構

代表者

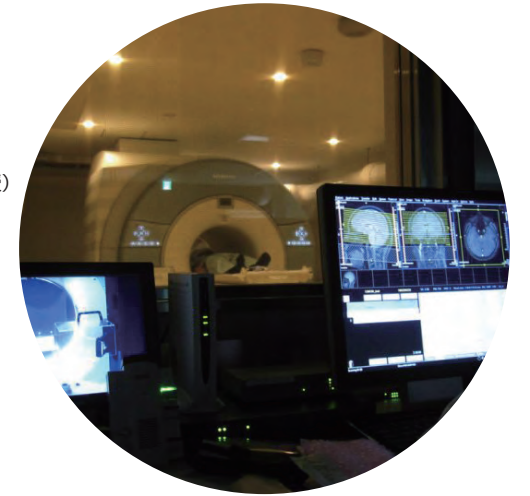
月浦 崇

京都大学大学院
人間・環境学研究科・教授



協力者

村井 俊哉
(京都大学大学院医学研究科・教授)
上田 敬太
(京都光華女子大学健康科学部・教授)
朴 白順
(京都大学大学院
人間・環境学研究科・特定助教)

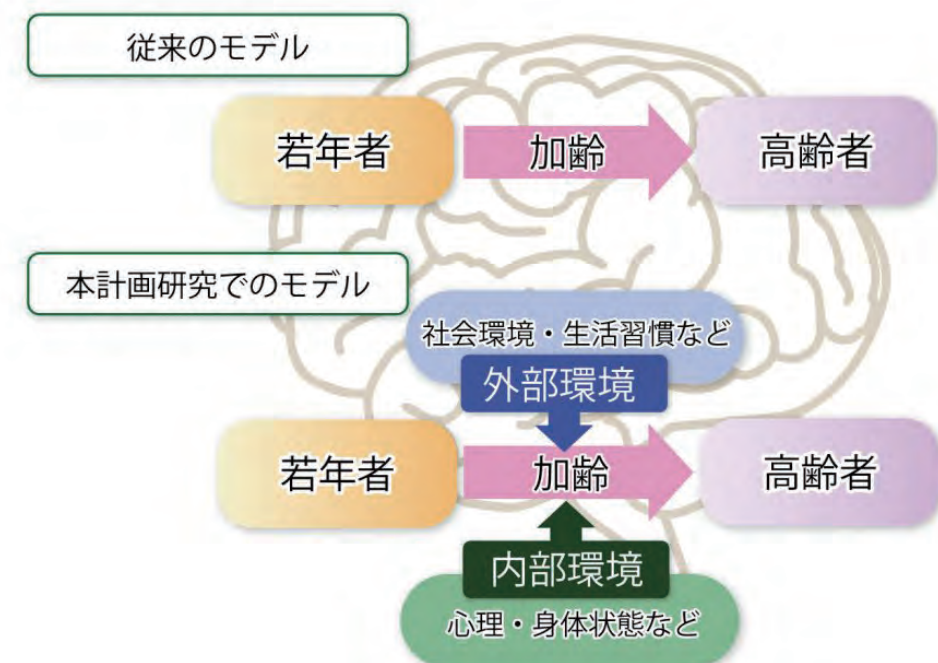


研究概要

本計画研究では、ヒトの記憶の加齢による経年変化を脳の器質的变化だけで説明するのではなく、他者との社会的関係性や生活習慣などの外部環境や、身体状態や感情などの内部環境との相互作用の中で、どのように脳内メカニズムが可塑的に変化するか視点から解明することを目的とする。その目的を達成するために、若年成人と高齢者の脳活動や脳

構造を多角的な脳画像研究法から検証する生理心理学的研究を実施する。さらに、脳画像研究で得られた知見の機能的妥当性を明らかにするために、神経疾患患者を対象として、記憶と環境との相互作用に関連する機能低下の特徴を神経心理学的手法によって検証する。これらの研究から、環境との相互作用の中で可塑的に変化する高齢者の記憶機能

の特徴とその脳内メカニズムを明らかにする。この成果を通して、社会の中で生活する高齢者においても、新たな知識や技能を獲得することが可能であることを科学的に証明することにつながり、従来の加齢観を刷新する高齢者の新たな可能性を証明することになる。



認知機能からみたこころの健康へのアプローチ： 予防とレジリエンスのために

代表者

松井 三枝

金沢大学国際基幹教育院
臨床認知科学・教授



協力者

中田 光俊

（金沢大学医薬保健研究域医学系・教授）

木下 雅史

（金沢大学附属病院・講師）

斎藤 大輔

（安田女子大学 心理学部・准教授）

吉澤 浩志

（東京女子医科大学脳神経内科・講師）

菊谷 まり子

（金沢大学国際基幹教育院・准教授）

院生

蝦名 昂大

（金沢大学大学院臨床認知科学研究室博士課程）

佐藤 邦子

（金沢大学大学院臨床認知科学研究室博士課程）

相上 律子

（金沢大学大学院臨床認知科学研究室博士課程）

樋口 杏

（金沢大学大学院臨床認知科学研究室修士課程）



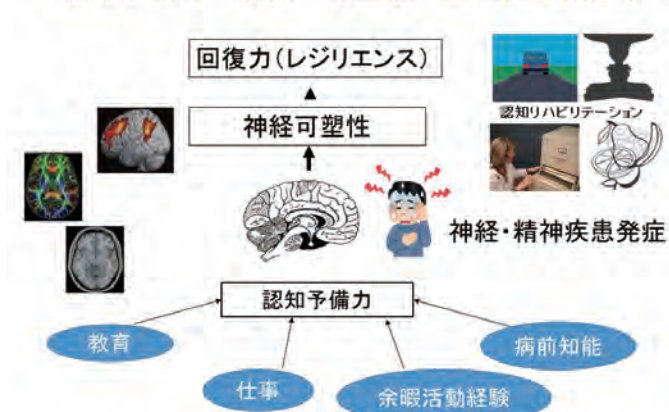
研究概要

認知機能という観点から、思春期から成年早期に変化が認められる統合失調症および青年や成人とくに高齢期までの脳器質性疾患、認知症や気分障害について検討する。これらの疾患では認知機能障害がしばしば認められることが知られており、日常生活機能や精神機能の維持および社会復帰には認知機能の問

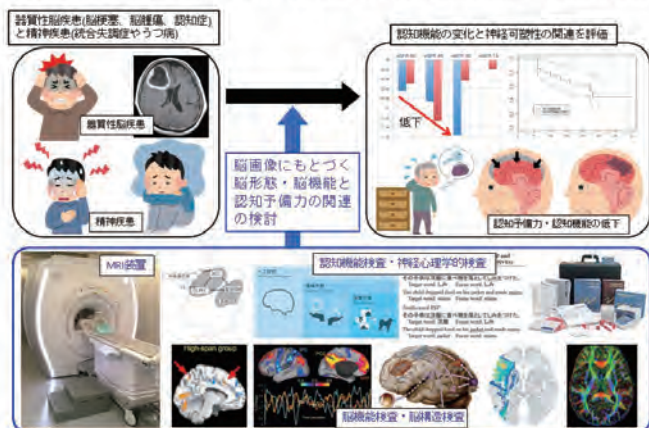
題が大きいと考えられる。予防的な観点から、青年や健常成人のメンタルヘルスと適応性の調査を行ない、認知予備力や認知機能活性の介入による効果を検討する。さらに、神経疾患、脳損傷患者および精神疾患の認知の障害される機能と温存される機能を明らかにする。また、これらの患者の認知機能と認知予備

力の関連を検討し、社会復帰や術後回復力の予測データを構築する。さらに、認知機能・認知予備力と脳構造・脳機能との関連を検討することにより、神経可塑性への寄与を明らかにする。このことにより、新しい生涯観の下で人間の一生を支える脳とこころの機能維持に資する機構の解明に寄与することをめざす。

認知予備力—病気—可塑性—回復力の繋がり



神経疾患と精神疾患について認知予備力と認知機能の関連の検討



高齢者の社会参加の家族的・社会的条件の探索

代表者

筒井 淳也

立命館大学産業社会学部・教授



分担者

菊澤 佐江子

（法政大学社会学部・教授）

竹内 麻貴

（山形大学人文社会科学部・准教授）

田中 慶子

（慶應義塾大学経済学部・特任准教授）

渡邊 大輔

（成蹊大学文学部・准教授）

協力者

前田 信彦

（立命館大学産業社会学部・教授）



研究概要

本研究では、「生涯学」の重要な課題のひとつとなるであろう高年期の社会参加について、社会調査を通じて探索することを課題としている。

20世紀後半から、経済先進国では「女性の社会参加」が重要課題となってきた。しかし少子高齢化が進む日本では、女性のみならずその

他の社会グループにおいても、有意義な社会参画が進められることが望ましいと考えられる。ただ、その社会的条件については、体系的な研究がまだ十分に進められていない。

社会的条件というのは、身体能力・認知能力で問題のない場合でも必要なものである。たとえば女性は、能力の面で男性と同等でも、家

族のケア負担や家族支援制度次第では、十分に活動することができない。同様に高年期グループでも、その潜在能力を十分に発揮し、人生を楽しむことができる条件があるはずである。そういった条件の探索を通じて、「生涯観の刷新」という領域課題に貢献する。

社会参画 （就業、社会貢献等）

家事・育児分担
職場環境整備
両立支援

女性

高齢者

ウェルビーイングの 規定要因に関する実証的研究

代表者

柴田 悠

京都大学大学院
人間・環境学研究科・准教授

協力者

三谷 はるよ

(龍谷大学社会学部・准教授)

安村 明

(東京大学社会科学研究所
・准教授)

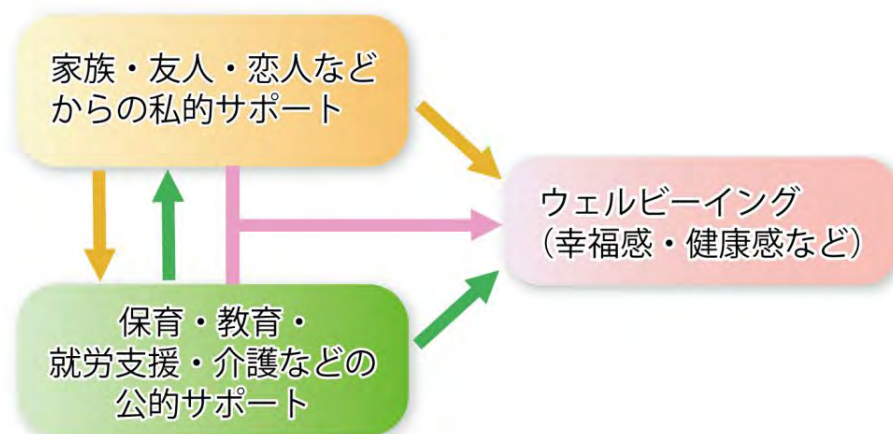
研究概要

本研究では、本領域「生涯学」がめざす「豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明」とその成果の「社会実装」に向けて、現代日本社会における「豊かな人生」つまり「ウェルビーイング(幸福感・健康感など)の高い人生」の社会的要因をさぐる。

具体的には、生涯全体にわたる視点から、私

的・公的サポートとウェルビーイングの関係に着目する。つまり幼少期から青年期、壮年期、高齢期にかけて、ライフステージの各時期にどのような私的サポート(家族や友人など身近な人からのサポート)や公的サポート(保育・教育・就労支援・介護など)を受けることが、その後の人生でのウェルビーイングにどのような影響するのかを検討する。

そのために、生涯の各時期に受ける私的サポートと公的サポートを詳細に把握する、日本で初めての大規模な質問紙調査を実施する。それにより、どのような社会関係や支援が「ウェルビーイングの高い人生」をもたらすのかを検証し、実践的・政策的示唆を得ることをめざす。



技能・熟練・暗黙知の習得・ 発達過程に関する人類学的研究

代表者

金子 守恵

京都大学
アフリカ地域研究資料センター
・准教授

分担者

重田 真義

(京都大学アフリカ地域研究
資料センター・教授)

山越 言

(京都大学 ASAFAS・教授)

伏木 香織

(大正大学・教授)

座馬 耕一郎

(長野県看護大学・准教授)



協力者

青山 朋樹

(京都大学大学院医学研究科・教授)

坂本 龍太

(京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授)

相原 進

(京都大学アフリカ地域研究資料センター・研究員)

神野 知恵

(人間文化研究機構・特任助教)

鈴木 良枝

(東邦音楽大学・非常勤講師)

萩原 卓也

(京都大学アフリカ地域研究資料センター・研究員)

山田 千佳

(京都大学東南アジア地域研究研究所・特定研究員)

院生

下山 花

(京都大学 ASAFAS 一貫制博士課程)

金森 謙輔

(京都大学 ASAFAS 一貫制博士課程)

鈴木 功子

(京都大学 ASAFAS 一貫制博士課程)

小寺 典子

(京都大学 ASAFAS 一貫制博士課程)

長塚 正一郎

(京都大学 ASAFAS 一貫制博士課程)

田中 綾華

(京都大学 ASAFAS 一貫制博士課程)

前田 夢子

(京都大学 ASAFAS 一貫制博士課程)

ASAFAS : 大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

研究概要

本研究は、アジアやアフリカ諸地域に暮らす技能集団が身体を通じて暗黙知を体得する過程に焦点を当て、担い手たちの 1) 生物学的発達を示す行動調査、2) 身体技法の習熟度、3) 発達段階の文化的制度化の相関性について精査し、文化人類学的な比較検証を行う。アジアやアフリカのさまざまな地域に

暮らす技能集団を対象に、彼女 / 彼らの身体技法(伝統的な身体の動かし方の様態)に注目して、それらの行動に必要な技能を獲得・熟練させる一連の過程(=習熟過程)を質的・量的な尺度で記録・分析し、それらが当該社会における発達段階とどのように関連しているのかを示す。それらの一連の事例研究

を、生存に関わる行動ユニット(分担者: 重田真義、山越言)と表現に関わる行動ユニット(分担者: 伏木香織、座馬耕一郎)の二つのユニットにわかれて分析検討しながら、多元的な発達過程を描き出し、「生涯学」がめざす従来の生涯観を刷新することに貢献する。





生涯を通したヒト - モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究

代表者

倉田 誠

東京医科大学医学部・
准教授



分担者

風間 計博

(京都大学大学院
人間・環境学研究所・教授)

安井 真奈美

(国際日本文化研究センター・
教授)

新本 万里子

(国立民族学博物館・研究員)

協力者

桑原 牧子

(金城学院大学文学部・教授)

大室 和也

(AAR JAPAN・佐賀事務所長)

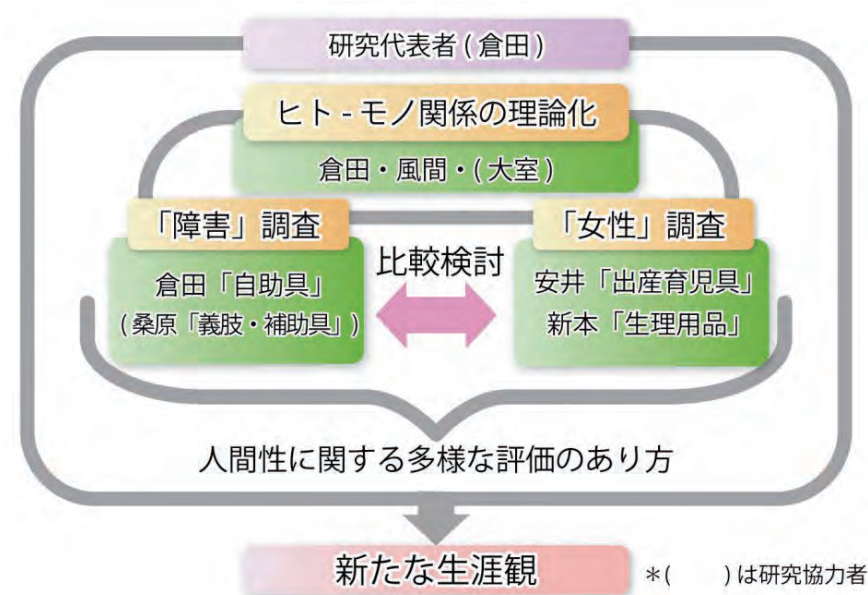


研究概要

本研究班では、日本やオセアニアの諸社会において身体や認知の障害を軽減したり、性差による生理的变化や社会的役割に対応したりする際に使用・装用されるモノに着目し、1) それらが社会に導入され個々の身体に馴染ん

でゆく過程、2) それらを用いる人びとの用法や動作の変化、3) それらを身につけ用いながら生きてゆくことに対する社会的評価、を行動観察やインタビューを主とした継続的な参与観察により明らかにする。障害や性差とい

ったそれぞれの身体や生活の状況に応じたモノとの関わりに焦点をあてることで、成長から衰退へといった一元的な発達モデルを問い直すとともに、各社会の事例から新たな生涯観を打ち出す鍵を探り出す。



生涯学習に関する国家政策および地域主導計画の東アジア的視座からの検証

代表者

石井山 竜平

東北大学教育学研究科・
准教授



分担者

上田 孝典

(筑波大学人間系・准教授)

李 正連

(東京大学大学院教育学研究科・
准教授)

上野 景三

(西九州大学子ども学部・教授)

山口 香苗

(早稲田大学総合科学学術院・助教)

西川 一弘

(和歌山大学紀伊半島価値共創基幹・准教授)

小山 竜司

(神奈川大学法学部・教授)

松本 大

(東北大学大学院教育学研究科・准教授)



研究概要

本研究の目的は、本領域における心理学・社会学・文化人類学からなる一連の計画研究から得られた知見を、各自治体の社会教育・生涯学習の担当職員や教職員むけの講習・研修プ

ログラム、およびこれからの生涯学習計画にパイロット的に実装化することにある。並行して、1) 隣国(東アジア)と日本における生涯教育政策・実践を比較検証しつつ、2) 地域主導

の生涯発達支援の新展開や、学校教育を包含した統合的な地域人材育成計画の新展開に加盟していくことで、政策と実践の双方への実装をめざす。



業績

論文

1. Sugimoto, H., Dolcos, F., Tsukiura, T. 2021. Memory of my victory and your defeat: Contributions of reward- and memory-related regions to the encoding of winning events in competitions with others. *Neuropsychologia*, 152: 107733.
2. Katsumi, Y., Kondo, N., Dolcos, S., Dolcos, F., Tsukiura, T. 2021. Intrinsic functional network contributions to the relationship between trait empathy and subjective happiness. *NeuroImage*, 227: 117650.
3. Kotegawa, K., Yasumura, A., Teramoto, W. 2021. Changes in prefrontal cortical activation during motor imagery of precision gait with age and task difficulty. *Behavioral Brain Research*, 399: 113046.
4. Hide, M., Ito, N., Kurora, N., Kanda, M., Teramoto, W. 2021. Multisensory integration involved in the body perception of community-dwelling older adults. *Scientific Reports*, 11: 1581.

国際学会での口頭発表・ポスター発表

1. Cho, M., Tsukiura, T. Dissociable neural mechanisms between temporal and spatial contexts in episodic memory for context-rich scenes, CNS (Cognitive Neuroscience Society) 2021 Virtual Meeting, USA, 2021 (online).
2. Izumika, R., Cabeza, R., Tsukiura, T. Neural mechanisms of memory for facial expressions in young and older adults, CNS (Cognitive Neuroscience Society) 2021 Virtual Meeting, USA, 2021 (online).
3. Kaneko, M., Suzuki, N. International Workshop on Medical-Zairaiichi, a Medical-Local Knowledge Research Network, ZAIRAICHI [Local Knowledge] of Health Care in Africa and the Potential of Engaged Area Studies: Comparing the features of potters' bodies that live "healthier" in communities to the features of their hands and fingers while making pots, Kyoto, 2021 (online).
4. Kaneko, M. To the creation of a study field of "Lifelong Sciences": An anthropological study on the process of skill acquisition and biological processes in human development, Poster session on "The role of on-site research for innovation & STEAM education", International Workshop on Medical-Zairaiichi, a Medical-Local Knowledge Research Network, To the creation of a study field of "Lifelong Sciences": An anthropological study on the process of skill acquisition and biological processes in human development, Kyoto, 2021 (online).
5. Kurata M, Anthropological Study on the Generation and Transformation of the Lifelong Relationships between Humans and Things, Poster session on "The role of on-site research for innovation & STEAM education", International Workshop on Medical-Zairaiichi, a Medical-Local Knowledge Research Network, To the creation of a study field of "Lifelong Sciences": An anthropological study on the process of skill acquisition and biological processes in human development, Kyoto, 2021 (online).

国内学会での口頭発表・ポスター発表

1. 蝦名昂大, 松井三枝, 木下雅史, 稲田祐奈, 齋藤大輔, 中田光俊, 前頭葉腫瘍患者のワーキングメモリに対する仕事の複雑性の影響, 第55回北陸心理学会, 金沢, 2020年12月5日. (オンライン).
2. 佐藤邦子, 小野靖樹, 稲田祐奈, 蝦名昂大, 松井三枝, 双極性障害患者と健常人におけるレジリエンスとうつ傾向の関係, 第55回北陸心理学会, 金沢, 2020年12月5日. (オンライン).
3. 増田柚衣, 朴 白順, 上田敬太, 生方志浦, 村井俊哉, 月浦崇, びまん性軸索損傷による未来思考の障害機序, 第32回東北神経心理懇話会, 仙台, 2021年2月6日. (オンライン).
4. 松井三枝, 脳損傷患者における認知機能研究, 日本認知心理学会第18回大会, 金沢, 2021年3月4日. (オンライン).
5. 松井三枝, 認知機能からみたこころの健康へのアプローチ: 予防とレジリエンスのために-, 第10回金沢大学認知科学シンポジウム, 金沢, 2021年3月5日. (ハイブリッド).

活動報告

2020年11月26日 10:00-16:00 (オンライン開催)

石井山先生(D01:社会教育班)が、生涯学に関する研修会を開催しました

研修会テーマ:「共生社会をつくる」ということ

～誰もが自己を肯定できる社会になるために私たちにできることは～

2020年12月19日

C01:技能発達班(文化人類学)が第1回研究会を開催しました

メンバーの顔合わせと、研究計画班の研究目的、今後の計画について共有しました。

2020年12月28日

「生涯学」和文ウェブサイトを公開しました

URL: <https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp>

2021年1月8日

月浦崇先生(A02:生理心理班)たちが、生涯学に関する研究成果を国際学術雑誌にて発表しました

月浦崇先生(領域代表者・A02:生理心理班)たちは、勝見祐太 博士研究員・元米国イリノイ大学、現米国ノースイースタン大学)とFlorinDolcos先生たち(米国イリノイ大学)と共同で幸福感和感性を関連づける安静時脳機能ネットワークを解明し、その研究成果を国際学術雑誌「NeuroImage」にて発表しました。

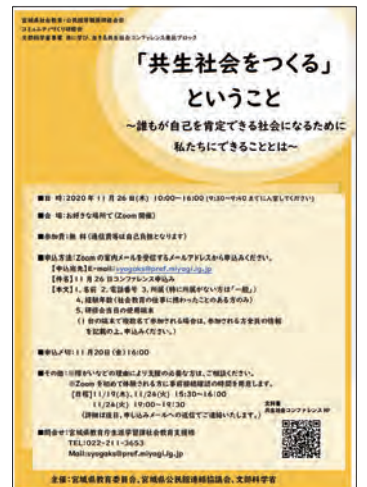
京都大学プレスリリース(2021年1月8日公開)<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2021-01-08-3>

書誌情報 【DOI】<https://doi.org/10.1016/j.neuroimage.2020.117650>

2021年1月23日 13:00-15:00(オンライン開催)

「2020年度キックオフミーティング+公募研究説明会」を開催しました

2020年度キックオフミーティング+公募研究説明会を13～15時にオンラインで開催しました。各研究計画班代表者がそれぞれの研究内容について紹介し、質疑応答を行いました。また、2021年度に募集する公募研究についての説明を行い、全国から200人以上の方にご参加いただきました。



活動報告

2021年2月19日

「生涯学」英文ウェブサイトを公開しました

URL : <https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp/en/>



2021年2月20日～25日

柴田悠先生(B02:ウェルビーイング班)がインターネット調査「生活と意識に関する全国調査」を行いました

全国の20～69歳男女計2万人から回答をいただきました。
ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。



2021年2月23日 14:00～16:00(オンライン開催)

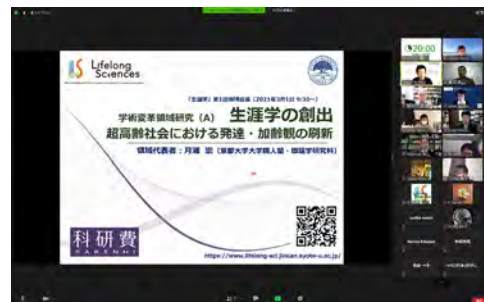
B01:高年社会参加班(社会学)が研究会を開催しました

B01班の研究分担者である渡邊大輔先生(成蹊大学)に「社会老年学の動向ならびに渡邊先生の最近の研究」についてお話しいただきました。

2021年3月1日 9:30～16:30(オンライン開催)

2020年度第1回領域会議を開催しました

お互いの研究内容を知ることが目的として、領域内のメンバー限定で領域会議を開催しました。8題の口頭発表と20題のポスター発表をおこないました。



【口頭発表】

- ・寺本渉「知覚系の知識獲得機構の加齢変化」
- ・月浦崇「記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構」
- ・松井三枝「認知機能からみたこころの健康へのアプローチ:予防とレジリエンスのために」
- ・筒井淳也「高齢者の社会参加の家族的・社会的条件の探索」
- ・柴田悠「ウェルビーイングの規定要因に関する実証的研究—保育の長期効果に着目して」
- ・金子守恵「技能・熟練・暗黙知の習得・発達過程に関する人類学的研究」
- ・倉田誠「生涯を通じたヒト・モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究」
- ・石井山竜平「生涯学習に関する国家政策および地域主導計画の東アジア的視座からの検証」



【ポスター発表】

- ・日高聡太*、佐々木恭志郎、川越敏和、浅井暢子、寺本渉「身体の所有感と主体感の自然なありさま」
- ・寺岡諒*、黒田尚輝、寺本渉「マルチモーダル情報処理による身体知覚メカニズムの解明～高齢者と若齢者の様相の比較から～」
- ・寺岡諒*、寺本渉「脳の可塑性による注意機能の改善に関する基礎的研究」
- ・黒田尚輝*、寺本渉「高齢者の身体知覚特異性の形成プロセスの解明～若齢成人を対象とした疑似高齢者研究～」
- ・藤井芳孝*、寺岡諒、黒田尚樹、寺本渉「行為の自発性が時間知覚に与える影響とその加齢変化」
- ・増田柚衣*、朴白順、上田敬太、生方志浦、村井俊哉、月浦崇「びまん性軸索損傷による未来思考の障害機序」
- ・山本健太*、増本康平「成人自閉症者のアウトプットモニタリングとルールの記憶に関する研究」
- ・長美希、月浦崇「Dissociable neural mechanisms between temporal and spatial contexts in episodic memory for context-rich scenes」
- ・泉家怜奈*、Roberto Cabeza、月浦崇「Neural mechanisms of memory for facial expressions in young and older adults」
- ・永松基記*、中島健太、杉本光、月浦崇「Vicarious Rewardの基盤となる共感と報酬に関する右側頭頭頂接合部と線条体の神経表像」
- ・Paeksoon Park*、Hodaka Yamakado、Ryosuke Takahashi、Shikiho Dote、Shiho Ubukata、Toshiya Murai and Takashi Tsukiura「Reduced Enhancement of Memory for Faces Encoded by Semantic and Socioemotional Processes in Parkinson's Disease」
- ・菊谷まり子*、松井三枝「コロナ前後の日常行動比較:スクリプト記憶と臨床への応用の検討」
- ・蝦名昂大*、松井三枝、中田翔太郎、樋口悠子、鈴木道雄「統合失調症の前頭葉機能に関する検討」
- ・樋口杏*、松井三枝「メンタルヘルスと認知機能の関係」
- ・菊澤佐江子「Family Caregiving, Work-Family Conflicts, and Well-being in Contemporary Japan: Working Men and Women in Middle to Late Adulthood」
- ・三谷はるよ「子ども期の逆境体験(ACEs)が将来の養育行動に与える影響」
- ・伏木香織「"花"の形成—成長発達・加齢と演奏における体力と技術・知識」
- ・座馬耕一郎「野生チンパンジーの生活と技能発達」
- ・山越言「ギニア共和国ボソウの野生チンパンジーにおける高齢化」
- ・桑原牧子「義肢装具が拓く新たな身体観」
- *: 主たる発表者

2021年3月25日 13:30～15:30(オンライン開催)

C01:技能発達班(文化人類学)とC02:ヒトモノ班(文化人類学)が文化人類学連携若手ワークショップを開催しました

ワークショップテーマ:生涯学の創出にむけた人類学的研究

【ポスター発表】

- ・鈴木功子「エチオピア地方都市、保健普及員による保健衛生活動の役割と可能性」
- ・小寺典子「ベナン都市部の初等教育の現状:「教育の質」に関する取り組みの考察に向けて」
- ・金森謙輔「現代スーダンにおける変革を担う女性たちのライフコース: 2019年の政変をめぐる社会活動の事例から」
- ・鈴木良枝「バリのガムラン音楽における演奏技術の継承と変遷—演奏テンポの事例から—」
- ・田中綾華「雅楽の演奏集団の音楽実践と社会的な関わり」
- ・相原進「民俗芸能・大道芸における高齢者による技術の習得と創造」
- ・長塚正一郎「環境の知覚に関する人類学的研究:ヨット競技における人・海・風の関係性に注目して」
- ・萩原卓也「習得技能の競技引退後における展開 ケニアの自転車競技選手の事例から ケニアの自転車競技選手の事例から」
- ・三津島一樹「機械に対する知覚と技能の形成:ガーナ都市部の自動車修理工を例として」
- ・山本健太*、増本康平「成人自閉症者の感情調整に関する研究」
- ・佐野文哉「フィジーのろう者の言語イデオロギーと言語レパートリーの変化」
- *: 主たる発表者

